黒く染った純白の彼女

灯利

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある男の子がとある女の子と出会うお話。

ダークっぽいラブラブ目指します。

突発発進。好評なら多分続きます。

目次

登場人物という名のメモ書き ―― 1
やしきのなかには？
街の大きなお屋敷の女の子 ―― 4
それはきっと突然のことで ―― 16
妹があらわれた！ ―― 24

登場人物という名のメモ書き

簡単に主要人物＋おまけの皆さんの紹介をしておきます。
なぜかというとプロットが無いせいで自分でもかなり記憶が曖昧だからです。

主人公　マキ
孤児院で暮らす男の子。年長組で、孤児院のみんなからは良き兄として親しまれている。
好奇心旺盛で、何にでも首を突っ込みたがる。
身長は１５８ｃｍ（推定）
体重は平均よりも軽い。
ベレー帽をよく被っている。
目は赤、髪は黒。
小柄なことと、中性的な見た目がコンプレックス。

???　黒染シズク
街のお屋敷で暮らす少女。屋敷の中に入り込んできたマキを見て「面白い」と評価した。
同時に、彼がいなくなった後彼のことを兄と呼ぶ。
屋敷の人間のことを黒服さんと呼び、身近な従者として御影を従えている。
身長は１５２ｃｍ（推定）
体重は平均よりだいぶ軽い。
腰まである亜麻色の長髪。
人形のように不気味なほど整った顔つき。
目はマキより赤い赤い更に赤い赤。
楽しくなるとよく一人でくるくる回っているのがよく目撃される。
クセなのかはよくわからないが、会話の中では結構な頻度で「あは。」と笑う。

孤児院（教会のような見た目をしているが神は居ない）の主人　シ

スター
孤児院の子供達とシスターズをまとめる長（おさ）
優しそうな見た目通り普段は穏やかだが、約束事を守らない人間を絶対に許さない。
普段何をしているのかは不明で、時折夜中にどこかへと出かけているらしい。
見た目となりのトトロに出てくるカンタのおばあちゃんだが、
その割にとてつもなく貫禄と体力がある。
身長は１７２ｃｍ（推定）
体重は蟷ウ蝮？ｈ繧翫ｂ螟ァ蛻？瞻縺
髪の長さ　修道服（多分）を着込んでいるのでわからない

孤児院の労働者　シスターズ
マザーに付き従う人たち。常にそこら中で働いているが、驚くほどに存在感が希有。
脱…走する子供達を捕まえるのも仕事。

シズクの???　御影
シズクの側に控える女性。シズクのことをお館様と古風な言い方で呼ぶ。
身長　シズクが見上げるのが大変なくらい
体重　床板が軋む音がしないくらい

新入生　アリス
活発な女の子。マキ曰く、弱音という言葉を知らない太陽みたいに明るい子。
集団に馴染むのが上手いのか、新参と思えないほどに孤児院に馴染んでいる。
金髪で白いワンピースがよく似合う。
身長はマキと同じくらい。
体重はふわっと軽い。

譎よ釜諢丞袖豺ア縺ェ險?蜍輔ｒ隕九○縺溘ｊ縲∬◇縺薙∴縺溘ｊ隕九∴縺溘ｊ縺励→縺?ｂ縺ョ縺瑚ヲ九∴縺溘ｊ縺吶ｋ縲

友達　ジャック

マキの友達。特に仲がいいわけでもないが、悪いわけでもない。

金髪でガタイが良い。スケベ。

身長はマキより大分大きい。

体重は見た目相応。

やしきのなかには？
街の大きなお屋敷の女の子

「いいですか。何があっても町一番の大屋敷に近づいてはいけませんよ」

町外れにある小さな孤児院。
十数人の小さな子供たちが暮らす、その狭い楽園の中。
ここで育った孤児たちはみんな大人になるまでマザーやシスター達のお世話になる。
そして最初に教わるのが、大屋敷のこと。
マザーは新しい孤児達が入ってくると、何度もそう何度も言い聞かせてきた。
勿論、不思議に思う子達もいっぱいいる。
「なんで近づいたらいけないんですか」
「そこにはおっかないお化けが居るからですよ、ミス・アリス」
「私お化けなんか怖くないもん！」
入ったばかりの孤児の子、アリスがそう言う。
幼いながらもその元気な威勢のいい声に、思わずマザーも笑みがこぼれる。
「まぁ。じゃあ、今夜から夜のおトイレは一人でいけますね？」
「うっ…」
そう言われるとぐうの音も出ないアリス。
母屋から少し離れたはなれにぽつんとある孤児院のトイレは、孤児院の年長者であっても割と夜は近づきたがらない。
ぶっちゃけ暗いし怖い。
「それは・・・ごめんなさい」
「ふふ、よろしい。でも、本当にあそこは恐ろしい人たちがたくさん居るのよ。
私達は貴方達が危険な目にあって欲しくないだけ。それだけはわ

かって欲しいの。」
「うん！わかった！」
アリスの言葉にマザーは満足そうに頷くと、最後に締めくくる。
「じゃあ、今日もみなさん元気に過ごしましょうね」
『はーい』
パンとマザーが手を叩くと、一斉に子供たちがアリの子を散らすかのように散らばっていく。
孤児院ではありふれた日常。

…今まであの言いつけを破った人は居ない。
威勢よく出かけていった子達はみんな帰ってこなかったからだ。

・・・・。

『でも・・・ 気になるよね…』
それを側（はた）からじっと見つめていた一人の子。
その子の名前は、マキ。
ボロボロのベレー帽を被り、茶のつなぎを着ている細めで小柄な身体が特徴。
しかもその両目は珍しくも赤目で、髪はざっくばらんに切った黒髪。
マキは孤児院の誰よりも探究心が高かった。
新しい子が入ってくると必ず聞かされる、あのマザーの言葉。
素直に聞く子も居れば、彼のように逆に探究心が芽生えてしまう子もいる。

当然その目論見はシスター達に未然に防がれてしまうのだが、マキには周到な用意があった。
シスター達の巡回経路と時間を暗記し、部屋から抜け道、偽装云々何までみっちりと仕込んだのだ。
今は居ないマキの友達がマキに残した数少ない秘密の遺産。
あの時、元気にいってくると言って出ていった友達は悉くみんなどこかへ消えてしまった。

今度こそあの屋敷の秘密を暴いて、みんなを取り戻す。

そうして明くる日、夜更けを待って彼は自らの探究心を満たしに街へと忍び出た。
かくして、彼を変える大きな節目の日を迎えるのだった。

・・・。

街屋敷。
周囲をぐるっと一周囲うように垣根で覆われ、
正面には大きくて立派な大門と、よく分からない黒服のおじさんたち。
屋根しかよく見えはしないが、その内側には大きな建物が何棟も立ち並んいるように見えた。

『確かここが壊れてたはず・・・　あった！』

マキは周囲をこっそり怪しまれないように見回すと、
予め目星をつけておいた抜け道を使ってスルスルと中へと忍び込

む。
何度もこっそりと下見を繰り返しただけあって、中に入るのにさほど苦労はしなかった。
子供であれ潜り込めるか微妙な大きさの抜け道だったが、マキにとってはお茶の子さいさい。
普段恨めしく感じる小柄な体型だが、こういう時には役に立つものだ。

垣根を超えて中に入り、小さな藪道をかき分けるように通り抜けると所々灯りが灯る薄暗い庭園へと抜け出た。
月の灯りがゆらゆらと庭園の池へと反射し、池には小さくも立派な太鼓橋が架かっていた。
辺りを見渡して誰も居ないことを確認すると、向こう側へ渡るためにマキは太鼓橋を渡る。
すると橋下に居た魚たちがぴちょんと水面へ波紋を広げながら逃げていく。
月光に揺らめく水面に煌めく魚達に、思わず目が奪われた。

「綺麗だな…」

見とれて橋から池に覗き込むようにマキが立ち止まると、そこに声をかける者がいた。

「あの、もし…？」
「――!?」

心臓が飛び出すくらいにビックリした。
それはもうビックリした。
思わず飛び上がって悲鳴をあげそうになるのを口を塞いでなんとか防ぐと、ばっと横に振り向く。
そこにはキョトンとした顔でマキを見つめている小柄な少女の姿

があった。
（いつの間に・・・ !?）
気配も足音も何も無く突然に意識外から現れた白髪で小柄な少女。
暗闇に浮かぶ立派な和装の身なりから見ても、十中八九この子はこのお屋敷に住んでいる女の子だろう。
「えっと、僕は怪しいものじゃなくて・・・」
大義名分が自分の中にあるといっても、これは立派な不法侵入。
しかもあれだけ言って聞かされてきた言いつけを破ってまでここまで来てしまってる以上、
それによって孤児院に迷惑がかかることだけは何とか避けたかった。
どうしよう。
わたわたと脳内であーでもないこーでもないと考えていると、ふと急に少女がマキの手を引いた。
「こっちにきて」
「う、うぇ!?」
グイと結構な力で身体を引っ張っていかれた。
ひんやりとした彼女の小さな手は思ったよりも力強い。
彼女に引かれるままにあっという間に建物の側まで来ると、
あれよあれよと気がついたら部屋の中にまで引きずり込まれていた。
「ぐえっ」
部屋の真ん中にドサッと投げ捨てられたところでハッと我に返り辺りを見回してみる。
それなりに大きい畳敷きの部屋にはこじんまりした机がちょこんと壁際に置いてあって、
隣には古い本が沢山入った本棚があった。
なにより目に入るのは異様なまでに多い人形たちの数々。
棚に置かれたものからひな壇に置かれたもの、
座布団の上に座っているものなど多種多様。
襖には金ピカに光る不思議な刺繍のような模様が浮かんでいて、マ

キにはこの部屋が
まるで自分の知らない異世界に迷い込んでしまったかのように思えてしかたなかった。
ゆらりと光に揺れる人形の影に混じって、一際大きな影が小さく揺れた。
振り返ると、さっきの少女が口元を袖で隠すように笑いながらマキを見ていた。
「あは。貴方って面白い人ね。この屋敷に近づくどころか中まで入ってきちゃうなんて。
とっても不思議な人。私これでも色んな人を”見てきた”けど・・・貴方みたいな人は初めてなの。」
さっきまでは暗くてよく見えなかった少女は、それはそれは人形のように綺麗だった。
腰の辺りまで伸ばした亜麻色の髪に、マキと同じか、それ以上に深い赤に染まった瞳。
よくよく映える小さく可愛らしい紅の唇に、スっと透るような陶磁のような白肌。
あほ面かまして後ろに倒れるように腰抜けてたマキに四つん這いになったまま彼女が這い寄ると、
彼女の赤い和服の裾が垂れるようにしてマキの身体に触れる。
四つん這いになったままマキと向かい合う彼女の唇とマキの唇が触れ合う直前。
彼女の吐息が明確に感じるようなそんな異様な近さ。
視線は彼女の目に釘付けになったままだった。
クイと彼女が右手でマキの顎を撫でると、その至近でじっと瞳と瞳が交差する。
どこまでも紅い紅い彼女の目にうっすらと映る自分の影。
まるで自分自身ではなく、その心の中を直接覗き込まれているかのような感覚に、全身が鳥肌立つ。
「その・・・。」

「…あは。」

カラッカラになった喉から絞り出したように声をかけると、さっきまでの張り詰めた感覚が
嘘のように弛緩し、ニッコリと彼女はマキに笑って見せた。
「言わないで。わかるわ。心配しないでいいの。貴方のことを取って食うようなことはしないもの。
させるようなことはさせないもの。これはそうね… そう。出会いね。私と貴方の記念すべき出会い。
私もすっごく久しぶりにドキドキしてるの。こんな人が居たんだって、今まで信じられなかったもの。
とっても不思議。名前も知らない貴方にここまで興味が惹かれるなんて。」
「ふぇ!?」
得体の知れないよくわからないことを言い立てる彼女。
ニッコリと笑いながら、彼女はペタンとマキの投げ出された両足の上に座り込みながら言った。
「私は… シズク。黒染のシズクって言うの。…あなたの名前は?」
彼女がそう言うと、自然と口が開いていた。
「ぼ、僕はマキって言います。苗字は…無いです。ただのマキです」
「マキ… いい名前ね。」
「…友達がいっぱいここに来たはずなんです。でもみんな帰ってこなくて。だから僕も気になって。」
「うん?少なくとも私が初めて外の人と出会ったのは君が初めてなんだけどな。」
マキがそう言うと、ハテナと首を傾げるシズク。
「まぁ、そのことは後で家のものに確認しておきましょう。もしかしたら知ってる人が居るかもだし。」
「あ、ありがとうございー…」
「でも、貴方が…。いいえ、マキがここに来たのはそんな大それた理由からなの?」

シズクがそう言ってマキの言葉を遮った。
「…その…　ここに勝手に入ってきちゃったこと…　怒ってますか？」
「あぁ…　そのこと。別にいいわ。ちょっと驚いたけど、面白いもの見れちゃったし。特別に許したげる」
いかにも今更でどうでもいいことのようにシズクは言った。
「えっと、なんて言うか、シスター…孤児院の大人の人たちからここには近づくなって言われてたんだけど…
逆に気になっちゃって…　ちょっと探検するつもりで…」
「あは。それで潜ってきたら私にあっという間に見つかっちゃったのか。可愛らしい。いいよいいよ。許す許す。
…　でも気をつけた方がいいよ。ここ、私以外の黒服さんたちに見つかるとけっこー面倒になっちゃうし。
多分マキの友達も黒服さんたちに捕まっちゃったんだと思うよ」
「外にいたおっきな大人の人たち？」
「そうそう。彼ら無駄に用心深いというか、信仰深いからさ…あんまり友達のことは期待しないでおいてね」
そこで何かを思い出したかのようにシズクはあっ、と声を上げた。
「これも何かの縁（えにし）。君に私の”シルシ”をあげる。」
シズクはマキの名前を1文字1文字かみしめるかのように何度か口ずさむと、右手をそっとマキの胸元に押し付けた。
「あ、熱っ」
刺すような、熱い痛みが胸に走りつい声をあげてしまう。
「あは。男の子なんだからこれくらい我慢我慢。
…　これで次からは堂々正面から入ってこられるから。私、楽しみにしてるね。
本当はもうちょっと話してたいけど…今日はこれからちょっと用事があってね…。
また会いましょう、マキ。今日は私が送っていってあげるから、ゆっくり休んでね。」

「それは… どう… いう…」

シズクがマキの胸元にやった手をそのまま目にかざすと、突如マキの意識が遠くなった。

後ろ手に支えていた手の力が抜けて、ガクリと後ろに倒れ始めて…

「それか… あんまりにも来てくれないと、寂しくて私のほうから会いに行っちゃうかもね。」

後ろに倒れそうになる身体を直前でシズクが優しく抱いて止めた。

「あは…。」

沈む意識の中、変わらずに笑っているシズクの顔が見え続けて、やがて消えた。

…。

かくしてマキの一世一代の大冒険はここで終わった。

順調に行っていたであろう探検はあっという間に少女に見つかってしまい、

あろうことかそのまま見ず知らずの少女の部屋に連れ込まれ、

気が付かない間に全てが夢のよう、嘘のように消えてしまっていた。

目を覚ますと、そこはマキのいつもの見知った天井が見えて、気がついたら昨夜の出来事は
夢のように消えてしまっていた。

「こ、ここは…」
「おっ。起きたな寝坊助。昨日は随分と長い厠だったけど、腹でも壊したのかい？」
「ジャック…。そんなに、だったかな？」
「おうよ。出てったっきり一時間くらいかな…そんくらい帰ってこなかったからもう少しで
マザー呼びに行くところだったぜ。よくあんなおっかないとこにそんだけ居れたよな。」
「そうか…」

ふと胸元に手をあてる。
とくんとくんと脈打つ心臓の鼓動を感じながら、昨日のことを思い出す。

「…夢じゃなかった…？」

手に残るシズクの手の感覚。
口元に感じた彼女の吐息。
あの吸い込まれるような、自分と一緒の赤い眼。

ただ一つ、明確に昨日と違っていたことがあった。

（これは…なんだ？）

マキの胸元には、今まで見たことの無い、羽のような痣が出来ていた。

・・・。

「ふんふんふーん」
「お館様。今日は随分とご機嫌ですね」
「そおー？」

大きな屋敷の庭園で、縁側に足をぶらつかせながら鼻歌を歌う主人に従者はそう問うた。
ご機嫌そうに笑いながら彼女は昨日あったことを思い出す。

「ようやく見つけたのよ。」

「…まぁ。」
「あれからずっと探して探して探して探して、ようやく見つかった私だけの彼。
ちょっと色々雑音も色々聞こえたけれど、そんなの関係無いわ。」
「我々はお館様のご意志のままに行動するまで。」
「ありがと、御影。期待してるね？」
「御意。」

従者はそう言うと忙しそうにどこかへと去り、また1人シズクが縁側に取り残された。
足をぶらぶら。
頭もぶらぶら。
とってもご機嫌良さそうに鼻歌をうたいつづける。

「あは。見つけた。わたしの”お兄様”」

それはきっと突然のことで

それは突然訪れた。

聖堂での朝礼を終えると、いつものように子供達がみんなバラバラに散っていく。

それに合わせて自分もさて外に行くかと足を踏み出そうとした時、ふと右肩に手が。

「…なんでしょう、マザー。」

「いいえ、ミスターマキ。貴方はその答えを知っている筈です。」

いつものマザーとは違う固い声色に、マキの体は少しばかり緊張した。

そっと後ろへ振り返ると、そこにはいつも通りのニコニコ顔のマザー。

よく見ると目が笑っていない。これは割とキレ気味に怒ってるおっかないマザーだ。

たまに外から黒服さん達がやってくると、よくこういう顔をしている。

明らかに怒っていないと言いつつ、心の中ではバキバキに怒っている、そんな感じ。

「…なんでしょうか。」

「…。」

明らかにそっぽを向いてしらばっくれるマキを見て、マザーは大きくため息をつくと、

諦めたようにマキへとその罪状を告げる。

「ミスターマキ。貴方、どこで魔法なんて覚えてきたんですか？」
「…えっ？」

屋敷に忍び込んだことが、マザーにバレた。…と思っていたのだが、どうにも違うらしい。

「貴方の体から微細ながらも魔法を行使した後が見られます。魔力を扱う魔法は危険だから
大人が居ない時は使わないようにと、これは前にもお話していますよね？」
「あー…。ごめんなさいマザー。ほんのちょっとだったら大丈夫かと思って。」
なんのことだろうと感じつつも、瞬時にこれは真実を誤魔化す好機だと確信した。
マキは素直にぺこりと頭を下げて、とりあえず心にもなくマザーに謝っておくことにする。
「そういう慢心から事故は起きるものですよミスターマキ。例え小さな火炎の魔法でも、
少し加減を間違えば大火傷をするかも知れないですし、それが他の人を傷つけない保証はありません。」
「はい。気をつけます。ちょっと興味があっただけなんです。」
「…貴方が他の人に増して好奇心旺盛なのはわかってはいますが、それを心配する身にも……」
「…あー。」

心の中で、余計なこと付け足さなきゃ良かったなと思った。
マザーの説教はこうなったらとてつもなく長い。
少しでも反論しようものなら当たり前のように説教が一時間単位で伸びていくし、
対抗手段はただ耐えるだけ。ひたすらに謝るのみ。

誰か助けて。
思わずそんな儚い希望を周囲へ求めるも、残念ながら孤児院のみんなはもう中庭へ出てしまって、
更にここには運悪くマザーを止めてくれるシスターも居ない。
残念ながらマザーの気の済むまでお説教は続くようだ。
…。

結局三時間を越えようかという説教時間の過去最高記録を塗りかえて、ようやくマザーから解放された。
マザーもいい歳なのに、どこからあんな気力が湧いて出てくるのか本気で不思議に思えてくる。
孤児院の中庭。割と端っこの方で外壁に背中もたれて座っていると、一人の少女がやってきた。
トテトテと小走りできたのは年少組のアリスだ。
アリスはマキの隣にそっと座り込むと、マキの顔を覗き込むようにして声をかける。
「マキにい、大丈夫？すーっごいお説教長かったみたいだけど…そんななんかやらかしたの？」
「…僕が説教されてたって、よく分かったね。」
「マキにいってすっごい顔に出るからよく分かるの。」
「…そんなに？」
「うん。」
アリスは最近孤児院に入ってきた子だが、もうそんなこと関係ないとばかりに孤児院に馴染んでいた。
なんといっても弱音という言葉を知らない逞しい子。
この適応力は見習いたいものだとマキは思う。
金髪小柄で、青色の瞳が綺麗な彼女。ボロの服を着ていてもその金

髪はキラキラと輝いていて、
　まるで小さな太陽を身近で見ているような錯覚を覚える程に彼女のことは眩しく見える。

「いや、まぁうん。ちょっとマザーとの約束破っちゃってね…」
「マザーとの？それはダメだよマキにい。マザー、約束事破ることに関してはすっごく怖いんだから。」

　そういうとアリスは両手を指折りながら『例えばあれにー…あとはこれでしょー？』と順に数え始める。
　恐らく約束を破った回数なのだろうが、口でいう割に結構やらかしてんな、とマキは内心思った。

「そう言うアリスも結構お転婆してるじゃない。」
「私はちゃーんと限度ってのを知ってるからいーの。」

　昨日マザーにトイレ同伴を餌に脅されていたとは思えない開き直りの良さに思わず笑ってしまう。

「またトイレ一緒に行ってもらえなくなるよ？」
「マキにいもまたそういうこと言うんだから！もう！」

　拗ねるアリスにごめんよと頭を優しく撫でてやると、
　わざとらしくプリプリと怒らせていた顔を途端に破顔させた。
　今回だけだからね！と。アリスがマキに言って頬をにっこりと膨らませる。

…。

そうやって他愛無い話をあーだこーだと暫く話し込んでいたのだが、
突然、アリスが何かを思い出したかのように立ち上がる。
「あ。ごめんマキにい。ちょっとみんなが呼んでるみたい。行ってくるね。」
「ん？うん。ありがと。気をつけてね。」
スカートを軽く叩いて埃を落とすと、駆け出す前にマキに振り向き指をさす。
「マキにいも…ね。あんまり〝抜け出して変なとこ行っちゃダメ〟だよ。最近色々物騒みたいだから。」
「はいはい。早く行った行った。」

じゃあ、と颯爽に孤児院に駆けていくアリス。
それを見送っていると、ふと胸のあたりがズキりと痛んだ。
焼き付くような焦げる痛さに思わず体を丸める。
やがて暫くすると痛みは止んだが、
それと同じくらいにマキの頭の上に何かがトサリと落ちてきた。

「…手紙？」

ハラリと地面に落ちたそれを拾ってみると、
白い封筒に『マキ様へ』と宛名が楷書で書かれた一通の手紙。
おもむろに裏へ返してみると、朱の花押で封をされた左下に差出人の名前が小さく書かれている。
『黒染シズク』と。

その日の夜。

マキは例の屋敷の中へと再び足を踏み入れていた。

…。

黒染シズクは生まれながらの天性を持って生まれてきた。
例えそれが本人の望まぬ力だったとしても。
それを一族はこぞって始祖様の再来だと祭り上げ、称えてきた。
始祖様以来、徐々に力を落とし続けてきた没落を辿る一族に生まれ落ちた唯一の例外的存在。
いわば神の力の一片であり、それは天から降り注ぐ一族の没落を憂う神の流した涙の「雫」の一滴であると。
今思えば、そんなの馬鹿馬鹿しいにも程があった。
…でも当時のシズクは幼すぎた。
幼いシズクはそんな大人たちの勝手な欲望を理解出来ず、ただ愚直に稽古や仕事に励んだ。
周りの大人たちに言われる通りのまま作法を覚え、儀式を覚え、勉学に励み、技を磨き、力を行使した。
そこにはなんの疑いも思惑もなく、ただただ言われたことを成し遂げるときまって両親が喜んでシズクを褒めて頭を撫でて、時には美味しいお菓子をくれたり、一緒にお出かけをしてくれるのが嬉しかった。
そんなことを繰り返していくうちに、シズクは大きく成長する。
自分がやっていることがどんなことなのか、シズクは考えるようになった。
一族のシズクへと抱く狂気の感情に、シズクは少しずつ恐怖を覚えるようになった。
…両親がシズクのことをあまり見てくれなくなったのを寂しく感

じた。

やがて一族はかつての繁栄を取り戻すかのように再起を始め、途端に腐り始めた。

皆が皆、己の望む欲と権力に溺れていった。

…そして誰も、シズクのことを人として見なくなった。

蔵に財貨が貯まるほど、一族はみなシズクの力に溺れるようになり、

一族の中で権力を握った両親も、いつしか欲に塗れた豚に成り果てた。

仕事を失敗すれば、それでも誇り高き一族の末裔かと激しく叱咤され、

辛く苦しい仕事をどんなにこなしても、もう誰も見向きもしない。

あんなにも仲良かった両親も、もうシズクを一人の子としては見なくなった。

そこにあるのはもはや血縁関係という重く外れない血で出来た鎖だけ。

どんなにいいことをしても、どんなに自分を犠牲にしようと、そこにあるのは無力感だけだった。

「そんなに苦しいなら、僕が全部ブッ壊してあげるよ」

「……えっ？」

突然シズクの前に現れたのは、全身を真っ黒い着物で染めあげた一人の男だった。

「僕は君の願いを叶えてあげる。その代わり、君は僕の願い事を一つ、叶えて欲しいんだ」

そう言って彼はシズクに手を差し伸べると、続けてこう言った。

「君をこの牢獄の中から出してあげるよ」

…。

妹があらわれた！

「おはよ、お兄ちゃん。」
「…おはよう、シズク。」

僕があの大きな街屋敷に忍び込んでから、かれこれ長い月日が経った。
今では新たに出来た妹と、街中のあの大屋敷で暮らしている。
孤児院には帰ってはいない。今はあの場所はどうなっているのか、僕にはわからない。

…妹。

妹ねぇ…。

…端的に言えば、あの黒染シズクが僕の妹になりました。

「お兄ちゃん…てのはせめてやめない？」
「じゃあ、お兄様とかですか？」
「そうじゃなくて…」

…。

手紙を渡された後、僕はあの日向かった屋敷にまた向かっていた。
今度は夜ではなく昼間に堂々と。
屋敷の門の前に立つと、改めて屋敷の大きさが規格外だということを感じる。
見上げるほどの大きな鉄門に、左右に大きく続いている白い壁。

待ち構えていた黒服の大男に案内されると、辿り着いたのは畳敷の大きな応接間。
暫くすると奥の襖が開いて、見知った顔が変わらずの笑顔を浮かべて現れた。
「ハァイ、マキ。また会えて嬉しいわ。」
黒服を背後に引き連れて現れたシズクはあの夜よりもはっきりと、綺麗に見えた。
白髪は絹のようにさらりと、腰まで垂れ、また白い肌は赤い和服によく生えて。
あの夜感じたシズクの人形のような無機質で、凍てつく冷たい雰囲気は感じなかった。
遊び盛りな年相応な幼児。マキがシズクに感じたのはそういう印象だった。
「手紙は読んでくれた？」
「…はい。」
「…あは。もっとあの時みたいに気軽に接してくれていのに。」
そこまで言うと、シズクは何かに気がついたように後ろを振り返る。
「あぁ、なるほどね。いいわ、私の部屋に行きましょう。ついてきて！」
「お嬢！」
「黒服さん達はここまでいいわ。」
「…承知しました」
何か言いたげな黒服の男達を放ってシズクが駆けていくと、

そこは前にシズクと出会った人形だらけの小部屋だった。
「さて。じゃあここなら大丈夫かな。」
対面して座布団に座ると、どこからともなくお茶が差し出されてきた。
「…手紙に書いてあったことって、どこまでが本当のことなの？」
「貴方が私の”兄”だってこと？…お茶美味しい。」
「いや、まぁ、それもなんだけど、その…。あ、ほんとだ、美味しい。」

「私と貴方が人工的に作られたクローン人間だってこと？」
「…ブッ」
思わず吹き出した様を見てシズクが笑う。
「あはは。汚いなぁ。…何もかも本当のことだよ。生まれつき嘘って大嫌いだから。」
「…ケホッ…信じられない」
吹き出したお茶に関心を一切向けずにシズクが言う。
「少なくとも、私がまともな人間じゃないってのは証明できるよ。…例えば、」
「えっ!?」
シズクは懐から小刀を取り出すと、徐に自分の袖を捲って斬りつけ

た。
血がポタポタと流れて畳に染みをつける。
「あは。お茶に血に…すっごい汚くなっちゃったね。まぁ、いいか。ほら見て…。ちょっとグロいけど…」
マキは驚愕した。シズクが斬りつけた腕の傷が瞬く間に治っていったからだ。
血が止まり、皮膚が伸びて、まるで逆再生しているかのように傷が塞がっていく。
「私は実験で生まれた数少ない成功例なの。私の体は例外なく傷ついても治るし、私が治そうと思ったものも
全部治る。流石に即死しちゃったりするとダメっぽいけど、多分かなりしぶとく治せると思うよ。」
今度はさっきより力を込めて斬ろうとしていたのでマキが慌てて止めに入る。
「この世にはね、目に見えない力がいっぱいあるんだって。私を作った人たちは”まそ”って呼んでたけど。」
「…シズクがとてつもなくすごいってのは、わかった。でも、それと僕とでなんの関係があるってのさ。」
「手紙を読んでくれたなら、多分全部分かってるよね。ていうか、わかるように全部書いたし。」
じっと深紅の瞳でジッと見つめてくるシズク。
それを見つめ返しながら、マキは震えるように紡いだ。
「本当に僕も君と同じ…クローン人間、ってこと?」
「そうでーす。それもなんとシスターズの中で唯一の失敗例で何故か

男の子になっちゃった例外的例外の超レアな存在！」
「そんなバカな…」
「あは。」

パンパカパーンと至極面白そうに話すシズク。

「畳をよく見てよ。なんかおかしいと思わない？」
「…え、!?　あ、あれ!?」

マキがお茶を吹き出した跡と、シズクが流した血の痕が綺麗さっぱりなくなっていた。

「それはお兄…マキの持ってる異能。自分ではあんまりわかってないうちに発動したりしちゃってるみたいだけどね」

思わずマキは自分の両手を見つめてしまう。

「本当はもっと色々秘密あるんだけど、知りたい？」
「…」

恐る恐る目線をシズクへと向けると、そこには変わらずニコリを微笑む彼女の姿。
自分の置かれた立ち位置が理解出来ずに思考が回らない。

「…わからない」
「…わかった。マキ…あぁ、めんどくさ…もうお兄ちゃんでいいよね。お兄ちゃんがそれを聴きたくなるまで、
私が待ってあげる。聴きたくなったら教えてあげるよ。それでいいよね。」

その代わり、とシズクが人差し指をピンと指してマキに言う。

「お兄ちゃん、あの孤児院に戻るのもう禁止ね。」

「…帰ります。」
「ダメです。」
「屋敷から出たら？」
「出るのは構わないけど、孤児院だけは禁止。」
「…何故？」
「あそこには鬼が居るの。」
「鬼…」
「あそこの”マザー”はこの屋敷を目の敵にしてるらしいけど、”私たち”からしたら奴らこそ諸悪の根源なんだよね。
お兄ちゃんが向こうで言われてた言いつけ破ってくれて凄い助かったよ。おかげでこうやって会うことができたんだから。」

こうしてマキの突然の屋敷暮らしは始まった。

…。

「あ、もしもし？マキにいには会えました？」

「…うん、うん、はいはい。なるほどね。…それは単に伝え方が下手くそだっただけなのでは？」

「…あーすみませんね。ちょっと最近ストレス多くって。そっちは一任しときますよ。念願のお兄様ですもんね。」

「…はいはい。わかりましたって。…まぁ、こっちも順調に進んでますよー。”マザー”の動向も大体掴めてきましたし」

「…ですね～。そこまではちょっと。」

「…はいはい。それじゃあ、また連絡しますね、お姉様。」